

- ・第2学年「探究チャレンジⅠ(後半)」は、エネルギーテーマの増加を図った。学年全員に探究者マナー講演を実施。
- ・第3学年「探究チャレンジⅡ」(1単位)は、課題研究継続希望者に実施。ハイレベルな研究成果をあげることがめざす。SSH生徒研究発表会等で発表。
- ・研修企画を充実させた。

(4) 第四年次

- ・3年間の成果を振り返り、プログラムについて再検討し、調整を加えた。
- ・第1学年「探究チャレンジⅠ」は、各内容を改善した。
- ・第2学年「探究チャレンジⅡ」は、テーマ設定に慎重を期した。
- ・第3学年「探究チャレンジⅢ」生徒がSSH生徒研究発表会等で発表。
- ・ドイツエネルギー研修を実施。再生可能エネルギー開発とその活用、生徒の国際化に関する取組を実施し、普及にも努めた。
- ・地域との連携を強める取組を実施した。

(5) 第五年次

第四年次の内容にさらに微調整を加え完成年度とする。

○教育課程上の特例等特記すべき事項

文理学科1年生「探究チャレンジⅠ」は、現行カリキュラムの「社会と情報」2単位履修分のうちの1単位をこの科目に替えて実施した。

2年生実施「探究チャレンジⅡ」は、現行カリキュラムで生徒が履修する「理数科課題研究」,(学)普通科課題研究」1単位をこの科目に替えて実施した。

3年生実施「探究チャレンジⅢ」は、現行カリキュラムで生徒が履修する「理数科課題研究」1単位をこの科目に替えて実施した。

なお、以上各科目の名称は今年度から変更したものであり、前年度までの報告書の「探究チャレンジⅠ(前半)」「探究チャレンジⅠ(後半)」「探究チャレンジⅡ」(学年進行順)と同一である。

○平成27年度の教育課程の内容

A. 授業時間内に行った項目

- ①学校設定科目「探究チャレンジⅠ」の実施 開発課題に対応して開発した科目
対象：文理学科1年生4クラス(160名)全員、隔週1回(65分)の割合で実施。
- ②「探究チャレンジⅡ」の実施 科学探究活動科目 毎週1回(65分)実施
対象：2年生文理学科理科選択者全員と、2年生普通科理型選択者で希望する者の合計127名
- ③「探究チャレンジⅢ」の実施 隔週1回(65分) 絞り込んだ3年生による課題研究活動

B. 課外時間に行った項目

- ①課外探究活動 1年生夏休み期間の個人探究活動と論文作成、
- ②科学研修活動
〈校外実施〉臨海部エネルギー研修・九州エネルギー研修・大阪大学先端研究施設研修・関東サイエンス体験研修
・ドイツ先進的エネルギー研修・原子力研修会・イオンモール四條畷研修
〈校内実施〉研究マナー講演会
〈その他〉他SSH校主催事業に参加(天王寺高校・三国丘高校・高槻高校・高津高校・泉北高校)
- ③その他 科学オリンピックに関する取組、地域との交流(小学校出前授業・ドイツ研修の市民報告会)

○具体的な研究事項・活動内容

A. 「四條畷エネルギー教育プロジェクト」開発の取組

- ① 探究チャレンジⅠの実施 1年生160名に実施。
1学期：風力発電機・太陽光発電機を使った興味づけ、エネルギー生産や変換、エネルギー情勢、研究発表を行うために必要な論文の書き方を身につけさせる授業を行った。
夏休み：個人課題研究活動を行った。各生徒は自分で設定したテーマについて、教員指導の下、各自で調査研究・論文作成等活動を行った。論文は互いに閲覧できるようにした。一部生徒は発表会に参加した。

2 学期：科学者として必要な素養を身につける取組や、原発の是非判断に必要な知識や興味づけを行った。

3 学期：進路や興味関心および次年度探究活動を見据えた分野別の講座を設定、さらに原子力利用の是非について考える講座を設け、いずれかを選択して学習させる展開とした。

② 探究チャレンジⅡの実施

文理学科 2 年生のうち専門学科『理科』選択生徒全員と、普通科『理型』選択生徒のうち希望し認められた生徒 28 名の、計 127 名が 37 の班をつくり、1 年かけて課題研究活動に取り組んだ。班員構成やテーマ設定は基本的には生徒の興味関心に基づいて決めるようにしたが、その内容の妥当性を検討し、実現可能性と興味の持続についてしっかり検討の上決定した。

各班に教員が 1 名つき、指導を行った。

活動は毎週 1 コマの授業時間を中心に行った。活動場所は理科の各実験室が主であったが、必要に応じて公園・廊下・小体育館等広く行われた。活動内容によっては、大学の研究室からアドバイスを受けた班もある。

活動内容を生徒自らが整理確認し、まとめ、発表し、評価を受けるため、またそれらの能力を高めるために中間発表会と最終発表会、そして論文作成を行った。発表会では専門家にもお越しいただき、幅広い見地からの評価を各班と全体に対してしていただいた。

作成した論文は本校図書館に並べ、自由に閲覧できるようにした。ポスターは選抜して廊下等に常時展示している。

③ 探究チャレンジⅢの実施

対象：3 年生のうち、前年に S S H 探究活動に参加し、継続を希望し認められた生徒 2 名

前年度の取組を継続研究し、よりハイレベルな成果をめざした。S S H 生徒研究発表会に出場したほか、他校でも発表し、プレゼンテーション能力も磨いた。

④ 研修活動の実施

1. 臨海部エネルギー研修 1 年生主対象者全員に実施。大阪湾岸地域のエネルギー輸入加工流通現場に入り、直接観察を行うことを通じてエネルギーの実際に気づき、問題意識を持たせる。

(天然ガス発電所・メガソーラー発電所・都市ガス工場)

2. 九州エネルギー研修 1 年生主対象者の中から希望者 11 名に実施。九州地方ならではの自然を生かしたエネルギー施設や研究施設による研修を通じて、生徒に自然エネルギーと日本のエネルギー産業の在り方について考えさせ、今後の学習への意欲を養う。

(北九州スマートコミュニティー・北九州次世代エネルギーパーク・別府温泉・地熱発電所・阿蘇山)

3. 大阪大学先端研究施設研修 1 年生中心の 120 名に実施。大阪大学における最先端の各種研究施設の見学研修および講演により、エネルギーを中心とした科学への興味関心意欲を高め、進路動機となることを期待して実施。(産業科学研究所、レーザーエネルギー学研究センター、核物理研究センター、2 名の先生による講演会)

4. 原子力研修 1 年生中心の希望者 39 名に実施。大学の原子力研究施設において、原子炉実習、発電技術学習、放射線実習を実施し、エネルギー問題に関する見識を深めた。

5. ドイツ先進的エネルギー研修 2 年生 15 名を派遣。事前交流や学習を踏まえ、8 月に渡航。ドイツにおける先進エネルギーの取組や活用状況を見ること、市民のエネルギー感覚や生活習慣を体験的に学ぶこと、現地学生との交流活動を行った。事後は校内をはじめ、市民などにも普及させた。

⑤ 校内発表会

探究チャレンジⅡやクラブなど課題研究活動の成果発表会を 2 回実施した。ポスター発表交流と、2 回目では選抜班によるプレゼンテーション発表も行い、発表能力と研究能力の向上を図った。

B. その他の取組

① 科学研修活動

1. 関東サイエンス体験研修 1・2 年生の希望者 13 名に実施。関東地域の科学にかかわる諸見学や研修講演等を通じて科学への興味関心を育て、進路を考える参考とした。

(東京大学・日本未来科学館・JAXA・産業技術総合研究所)

2. 研究マナー講演会 2 年生全員の 360 名に実施。探究活動を始めた生徒が、発表までの流れや注意を払わなくてはならないマナーについて、専門家から具体的に講義を受けることにより、正しい態度で活動することをねらいとした。

3. その他 大型商業施設見学、生徒による科学出前授業、講演会等、科学を振興する取組を行った。

② 科学オリンピック等への参加

数学の諸コンテスト、化学グランプリ、科学の甲子園大阪大会に出場した。

- ③ クラブ活動等 理科部・生物同好会・陸上部が探究活動を行った。また、夏の探究活動をきっかけにした課外活動班が活動している。
- ④ 外部発表会への出席・参加
SSH生徒研究発表会や大阪府生徒研究発表会等に参加した。

⑤ 研究開発の成果と課題

○実施による効果とその評価

- ・今年度は海外研修の実施などの研修活動と、地域とかかわる取組の充実を図った。
- ・今年度に向けた課題に対応した取組を行い、改善できた。

A. 「四條畷エネルギー教育プロジェクト」

A-1 探究チャレンジⅠの成果

- ・各取組において効果が認められ、エネルギーに対する興味関心と理解、サイエンス全般に対する理解と基礎能力の向上、探究活動を行うのに必要な基本的素養を身につける効果をあげられるプログラムが形づくられた。
- ・エネルギーに関連した仕事に就きたいと「強く思う」生徒が増加するなど、共感する生徒に対して意識を向上させることができた。

A-2 探究チャレンジⅡの成果 (2年生文理学科理科選択生徒中心の課題研究活動)

- ・課題研究活動において必要な事項が何であるのかを体験的に理解させることができた。
- ・課題であったテーマ設定については、多くの生徒が自分たちの興味あるテーマを設定することができた。
- ・課題である次年度継続希望生徒(探究チャレンジⅢ選択者)が増加する見込みである。

A-3 探究チャレンジⅢ授業の成果 (継続研究を希望した3年生の課題研究活動)

- ・取り組んだ生徒は探究能力や発表能力が一段と高まり、科学に対する興味関心をより高めることができた。

A-4 研修活動の成果

エネルギーに関して様々な角度からの研修活動と普及活動を実施し、目的意識や好奇心、日常のやる気に影響できる取組であることがわかった。

B. その他の取組成果

科学全般に対しての意識や見識を高める取組も様々な実施した。これらを通じて将来の可能性と目的意識をもたせ、探究マナーを深め、様々なことに挑戦しようとする人材に成長したと考えられる。

四條畷市との連携によって、出前授業や市民向け報告会、商業施設見学等が実施できた。

数学オリンピック予選ではじめてAランク生徒が誕生する等、地道に努力する生徒を育てる活動も進捗している。

○実施上の課題と今後の取組

A. 「四條畷エネルギー教育プロジェクト」開発の取組

① 探究チャレンジⅠ授業の課題

- ・探究意欲の高揚のため、入学早々に先輩の探究成果や発表を見せる、夏の課題研究に早期に取りかかることも可能にする、といった取組が有効と考えられる。
- ・エネルギー分野に進もうという生徒の増加が数値上認められなかったため、エネルギー関係の魅力を多くの生徒が感じられるようなプログラムの研究を継続する。
- ・エネルギーや科学というものは、将来の進路とは関係なく、すべての人に関わることであり、すべての生徒が関心を持ち、自発的に取り組むことのできるプログラム開発を行うよう、留意する。

② 探究チャレンジⅡの課題

- ・取り組んでいる内容に対する正しい理解を確実にする。
- ・日常や発表会の場において、生徒どうしの質疑応答を盛んにする。
- ・活動が一通り完結して達成感と次への意欲が湧くようにする。

③ 探究チャレンジⅢの課題

- ・参加生徒を増やすため、下位学年時での意識向上をはかる。

④ 研修活動の課題

- ・全員参加型の研修において、すべての生徒に効果を与えられるような配慮を行う。

②平成27年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発の成果と課題

① 研究開発の成果

A. 「四條畷エネルギー教育プロジェクト」開発の取組

A-1 探究チャレンジⅠの成果 (1年生主対象生徒160名に実施した学校設定科目)

a) 成果総括

- ・各取組において効果が認められ、エネルギーに対する興味関心と理解、サイエンス全般に対する理解と基礎能力の向上、探究活動を行うのに必要な基本的素養を身につける効果をあげられるプログラムが形づくられた。
- ・理系生徒に対してより大きく影響を与えることができた、あるいは、取組が進路選択に役立つ(この分野が自分に向いているか否かの判断材料を提供した)と考えられる。
- ・エネルギーに関連した仕事に就きたいと「強く思う」生徒が増加するなど、共感する生徒に対しては意識を向上させることができた。

b) 1学期の個別取組成果(数字は本文タイトルに対応)

- ・0 事前動機付け 入学後の取組へ接続しやすいことから、継続していく。
- ・1 屋上発電機 導入として生徒の心をつかむことができた。
- ・2 エネルギー情勢 課題研究のテーマにエネルギー内容が増えたことで一定の効果は認められる。
- ・3 物理 発電がエネルギー変換を駆使したものだとう理解を通して興味を深められた。
- ・4 化学 過去の優秀レポート明示すると、同様に努力して取り組もうとする生徒が多くなることがわかった。
- ・5 論文指導 早期に指導しておくことは、その後の論文を書く機会に役立つ。

c) 夏休みの取組成果

- ・6 夏休み期間 個人探究活動・論文作成
教員全員で取り組むことで、生徒が希望する幅広いテーマに対応でき、また、指導生徒の分散ができた。
探究と論文作成に慣じむといった目的もこれで叶いやすくなる。

d) 2学期の各取組別成果

- ・7 科学英語 英語に興味がある生徒には、科学と英語の両方一緒に学習できよかった。
- ・8 科学史 「科学的真理」を当たり前正しいものとして信じている生徒の感覚の根幹に揺さぶりをかけることができた。
- ・9 数学 新しい問題を解決する手法が身についた。
- ・10 生物 エネルギーへの興味と理解を高めることができる生物教材の開発ができた。
- ・11 原子力問題 原子力の賛否にかかわる知識を増やすことは、原子力問題やエネルギー問題を考えるきっかけとなることがわかった。

e) 3学期の各取組別成果

- ・12 選択数学 問題を具体化し、その後抽象化していく手法を生徒に確立させることができた。
- ・13 選択物理 基礎的な実験やデータ処理の実施により、実験に必要な知識や技術、データ処理の方法を学ぶことができ、科学的な興味を深めさせることができた。
- ・14 選択化学 2年次の課題研究活動に向け、実験操作の習熟と化学的思考力を向上させることができた。
- ・15 選択生物 2年次の課題研究活動に向け、器具操作やデータ処理に対する正しい態度が育成できた。
- ・16 選択原子力問題研究 賛否が分かれる問題において、他人を納得させる意見を述べる手法を身につける練習ができた。
- ・17 選択文系「環境を考える」 アクティビティを通じて、課題について把握し、より良い解決方法を見出す方法を身につける練習ができた。

A-2 探究チャレンジⅡの成果 (2年生文理学科理科選択生徒中心の課題研究活動)

a) 総括・課題研究活動を通して探究能力とその方法を理解し、身につけたと考えられる。

- ・課題研究活動において必要な事項が何であるのかを体験的に理解させることができた。
- ・科学に対する興味関心をより高めることができた。
- ・課題である、次年度継続希望生徒(探究チャレンジⅢ選択者)が増加する見込みである。

- b) テーマ設定
 - ・課題であったが、改善した結果、多くの生徒が興味あるテーマを設定できた。
 - ・エネルギー分野を課題テーマとした者は増加した。
- c) 活動能力形成
 - ・課題解決作業と発表活動によって、探究発表能力を伸ばすことができた。
 - ・研究者のモラルを認識しながら活動できる取組を行った。
- d) 発表活動
 - ・多くの生徒が科学に対する興味関心を高めることができた。
 - ・発表技術が一段と向上した。(ポスター構成、プレゼンテーション技術、英文)
 - ・発表活動は携わっている活動を考え見つけ直すきっかけとして効果がある。また、探究努力の原動力(意欲)を生み出す場であると言える。

A-3 探究チャレンジⅢの成果 (継続研究を希望した3年生の課題研究活動)

- ・取り組んだ生徒は探究能力や発表能力が一段と高まり、科学に対する興味関心をより高めることができた。

A-4 研修活動の成果

1. 臨海部エネルギー研修の成果 (1年生主対象者全員実施の見学研修)

- ・エネルギーの生産現場を見ることによって様々に感じる事が確かめられ、日本のエネルギー事情に対する意識を強め、目的意識や意欲の向上に効果があることがわかった。

2. 九州エネルギー研修の成果 (1年生の希望者11名)

- ・九州ならではの自然を生かしたエネルギー利用の見学を通して、自然エネルギーと日本のエネルギー産業の在り方について考えさせることができた。
- ・北九州スマートコミュニティエリアの研修時間を充分にとつたので、前年度よりもさらに詳しく学ぶことができた。
- ・研修先関係者の支援によって、目的を達成するのに必要なプログラムをつくりあげることができた。
- ・報告のために生徒が作成したポスターは普及に貢献している。

3. 大阪大学先端研究施設研修の成果

- ・科学への興味・関心が高めることができた。
- ・現在学んでいる内容がどのように研究につながっているのかを知ることで、日頃の学習意識の高揚につなげることができた。

4. 近畿大学原子力研究所研修の成果

- ・エネルギー全般に興味をわき日々の学習意欲の向上や科学的好奇心の高まりにつなげることができた。
- ・実際の経験が、今後の研究者としての素地の形成に大きく寄与したと考えられる。

5. ドイツ先進的エネルギー研修 (2年生の希望者15名)

- ・先進エネルギーの取組や活用を見ること、市民生活からエネルギーをはじめとしたあり方を体験してること、国際化の訓練、これらの普及といった本事業の目的は達成できた。
- ・研修成果の様々な発表活動を重ねることでプレゼンテーション技術の飛躍的な向上がみられた。
- ・現地関係者および四條畷市、在外公館など多くの人に支えられた事業になった。

B. その他の取組成果

B-1. 校内イベント

1. 研究マナー講演会 (2年生全員)

- 探究活動を行う生徒が、発表までの流れとその際に注意を払わなくてはならないマナーについて、理解した。

B-2. 校外イベント

1. 関東サイエンス体験研修 (1・2年生の希望者13名)

- 科学分野で近郊に無い施設の研修を行い、興味と意欲を喚起させ、周囲に伝えることができた。

2. イオンモール四條畷体験研修 (1・2年生の希望者20名)

- 普段見慣れた施設にも工夫が詰まっていることを知る事ができた。こういう活動は日常の学習意欲にも繋がるものと予想する。

B-3 科学オリンピック等への参加の成果

1. 数学の諸コンテスト 呼びかけに応じて意欲ある参加生徒が増えたことと、指導の技術が確立できたことにより、成果がみられた。
第26回日本数学コンクールへに参加し、優秀賞1名、奨励賞3名受賞。この4年間で最高の受賞者数。
第26回日本数学オリンピック予選に参加。はじめて予選通過（Aランク・地区表彰）者がでた。
2. 化学グランプリ 高度な内容の選考会への参加を通じて、化学に対する意識高揚と日常鍛錬の大切さを学ぶことができた。

B-4 クラブ活動等の成果

- ・理科部 化学グランプリや科学の甲子園に積極的に参加出場し、科学への興味関心に繋がっている。
新たに人工サファイアや人工ルビーの合成に関する実験を開始した。
- ・生物同好会 生徒の興味・関心に基づく実験・実習に取組、文化祭や発表会にも参加した。
年度当初から準備を始め、盛りだくさんの企画を催し、来場者から高い評価を得た。

B-5 外部発表会への出席・参加の成果

1. SSH生徒研究発表会
 - ・大勢の方々への発表経験を通じて、伝えること大切さを学ぶことができた。
 - ・研究活動の進め方、失敗を繰り返しながら研究を深めてゆくことへの大切さが十分に伝えられた。
 - ・見学生徒も相当数おり、本大会の目的に叶う良い刺激が得られた。
2. 大阪府生徒研究発表会等への参加
 - ・発表出場や見学を通して科学探究への興味関心を高める効果があった。

C. 校内におけるSSHの組織的推進体制

- 校務分掌上の位置づけ：SSH推進プロジェクトチームが担う。今年度発足。専任3名のほか、各学年1名兼任所属。
- ・運営委員会に参加することで、日程や生徒の動向等、事業推進に必要な理解や諸調整がスムーズに行えるようになった。
 - ・事業の項目ごとの担当者は、ほとんどに専任の3名を充てた。
 - ・分掌として独立したので、会議を持ちやすくなった。また、計画段階でのチェック機能が高まった。

② 研究開発の課題

A. 「四條畷エネルギー教育プロジェクト」開発の取組

A-1 探究チャレンジⅠ授業の課題（1年生主対象生徒160名に実施した学校設定科目）

a) 課題総括

- ・エネルギーに目的意識を抱きやすくする取組をさらに工夫する。
総合的な認識をみる調査においても比較対照集団に対してある程度の効果がみられたが、エネルギーに関しては効果が認められなかった。
エネルギーや環境に対する意識向上は、本時だけではなく、2年次以降のSSH活動はもとより、他教科授業や課外活動も関連した学校活動全体で育まれるものと考え、今後も推進していく。

b) 個別取組の課題（数字は本文タイトルに対応）

- 0 事前動機付け 発展学習まで行うよう促すとともに、1年次の探究活動テーマに接続する生徒が多く誕生するように見直す。
- 1 屋上発電機 ここで関心を抱いた生徒をそのまま発展学習に誘導する。
- 2 エネルギー情勢 講義形式主体の現形式を改め、問題意識を抱かせる活動プログラムを企画する。
- 5 論文指導 共通の手引があれば各担当教員が共通の指導ができるので有効である
- 6 夏休み期間 テーマを考える時間をもっと長くする。（早期から取組）
可能な生徒はできるだけ早期から取り組ませる。
- 7 科学英語 限られた時間で科学関係の知識をいかに広く持たせるか、アプローチの方法をさらに検討する。
- 8 科学史 自ら抱いた疑問を深めていく道筋を学ばせることができる教材も開発したい。生徒のグループワークも取り入れるようにする。
- 9 数学 生徒の興味のある内容で研究論文を書く取組を行いたい。
- 11 原子力問題 活動を主とした展開のプログラムを開発する。

A-2 探究チャレンジⅡ授業の課題 (2年生文理学科理科選択生徒中心の課題研究活動)

- ・発表会場での意見交流がさらに盛んになるよう工夫が必要である。(ポスターを1箇所を集めるなど)
- ・1年生生徒の見学者数を増やすようにする。
- ・期間内に探究が完成できるように改善する。また、テーマがすでに決まっている生徒は前倒しで開始させる。
- ・授業時間帯以外に時間をつくってデータをとっていきよう指導する。
- ・1年生夏の課題研究等を継続発展させる取組をさらに強化する。
- ・大学や専門機関からの支援をさらに充実させる。

A-3 探究チャレンジⅢ授業の課題 (継続研究を希望した3年生の課題研究活動)

選択する生徒を増やすために、1・2年次で魅力ある探究内容(テーマ)を設定させ、活動成果をあげさせる取組を継続する。

A-4 研修活動の課題

1. 臨海部エネルギー研修の課題 (1年生主対象者全員実施の見学研修)

より多くの生徒が興味深く感じるような経験ができるよう、研修施設や方法を開拓する。

2. 九州エネルギー研修の課題

近畿地方では経験できない場所や施設が他にもあるので、これまでの場所は情報として蓄積伝達し、他の様々な場所の情報を積み重ねていくことも行いたい。

3. 大阪大学先端研究施設研修の課題

進路選択に対する判断材料として寄与したと評価できる。

4. 近畿大学原子力研究所研修の課題

他の学習と有効に結びつくよう配慮する。

5. ドイツ先進的エネルギー研修

エネルギー研修の2日間で少々日程的に厳しかったので、3日間とし、場所や展開方法を検討する。

時事前学習をさらに充実させる。

B. その他の取組

B-1 科学研修活動

1. 研究マナー講演会の課題 (2年生全員の360名に実施)

教わったことが実際守られているかは、探究活動の指導教員が現場で確かめ指導することが必要である。

実際の探究活動時に、講演で教わったことをふり返りながら活動する工夫をする。

B-3 科学オリンピック等への参加に関する課題

1. 数学の諸コンテスト……可能性のある生徒を見いだす努力により、対象生徒の増加を図る。

2. 化学グランプリ……継続的な支援を通じてスキルアップに努める。

3. 科学の甲子園大阪府大会参加

経験を後輩へ伝え、継続的に参加させる。成績結果も向上させたい。

B-4 クラブ活動等に対する課題

・理化部……各テーマへの継続的な探究活動を通して科学への興味を高揚させたい。

B-5 S S H生徒研究発表会の課題 生徒への働きかけを通じて学校全体で同様の成果を広げ推進していく。

B-6 大阪府生徒研究発表会の課題 見学参加生徒数をさらに増やす。

C. 全体総括

2年生の主対象生徒と比較生徒との間ではっきりとした効果が認められなかった。特に「活かした仕事に就きたいか」の質問で、成果を反映した数値が得られない点の対応を行う。

対策：①課外時間を含め前向きに活動する生徒は、さらなる向上をめざすよう勧める。

②達成感や満足感を体験できるよう(未完成で終わらないよう)に目標の精査(欲張りすぎないなど)や連携等指導充実をさらに進める。

③テーマに対する満足感やスキルアップを実感した生徒が多い現状を、保てるようにする。